入選

限りある水源

黒部市立清明中学校　二年　福山　博也

私の住む、富山県の黒部市にはちょっとした自慢できることがある。そのこととは水の事だ。私の住む富山県黒部市には山のほうに黒部川が流れている。その山のほうには昨年百周年を迎えた温泉がある。そのほかにも黒部の水はきっと海外に飛行機で行ったことがある人なら飲んだことがある人もいるかもしれない。その理由は飛行機で配られている水には黒部の水が使われているからだ。そもそも皆は知っているのだろうか。一日に人間一人が使う水の量はどれくらいだろう。

私の家では一日に使ったお湯の量を確認することができる。私の家では三人で住んでいて、夜寝る前に確認してみた。結果は三百八十リットルぐらいだった。そう考えると大体お風呂で使うお湯の量は百八十リットルだから大体一人六十リットル使っている計算になる。しかしこの六十リットルはお湯だけだ。水の量も含めたらいったいどれくらいになるだろうか。調べてみると平均二百十四リットルらしい。今世界の人口は八十億四千五百万人いるらしい。そこでだ。一日で使われる量は大体単純計算しただけでも一兆七千二百十六億三千万リットル一日で使うことになる。全員が二百十四リットルということは限らない。もしかしたらそれよりも少ない量しか使わない人もいるかもしれないし、それ以上に使う人もいるかもしれない。そう考えるともしかしたら今の単純な計算よりも多くなるかもしれないし、少なくなるかもしれない。だがもし本当に一日にその量が消費されて行っていると考えたら、この世界から水が消える日も遠くはないかもしれない。そこで私は考えた。水は蛇口をひねればいつでも出てくる。この当たり前を脳裏から消すことである。今年起こった、能登半島地震のことを覚えているだろうか。あの地震では元旦に起こり、多くの人が帰省をしていたりして自宅に居なかった人も多くいるだろう。この地震の影響で崩壊した家や、断水にあった人も多くいるだろう。この時のことを思い出してほしい。この時は、水が出なくて困った人もいて心の大きな傷を負った人もいるかもしれない。だがこれで少しかは皆の心に焼き付いたと思う。水の大切さを。その地震発生時、僕はおばあちゃんの家に帰省をしていて、栃木県にいた。栃木県でさえ大きく揺れた。被害はなかったが。その帰り道、高速道路で新潟に入ったころだった。初めて見た。給水車という車を。この給水車が走っているということは、多くの人が水に困っていたということだ。この時にはたくさんの水を使うことができなかったはず。だから、そのころに対しての水と同じように扱えば、そうすれば、きっと少しかは水が節約されるはず。きっと蛇口をひねれば水が出る。その常識をいったん消して、このことを思い出せば少しかは、水の使用量を減らせるはず。水のことを、世界には使うことができない人がいることや、水に苦しんでいる人のこと。たとえ、一人が使う量を二百リットルにしたとすれば、大体一日で一兆六千九十億リットルだけに削減することができる。もしこれが一週間続いたとしたら、前の使い方と比べて七千八百八十四億千万リットルも削減することができる。このように、水の使用量で、簡単に大量の水を使わずに済むことができる。こうすれば、世界の水不足の地域の人々にも、水を届けることができるかもしれない。二十二億人が実際に水の困っている人はどれくらいいる事実を。もしこの削減できた量の水を届けることができるのなら、一人が一日に三百五十八リットルも使うことができるようになる。

このような取り組みをすれば、きっとたくさんの人が健康に生きられて、世界中にもきっとたくさんの笑顔で溢れる光景が見られるようになると思う。